目白にあった東京同文書院

保坂治朗

【司会】　それでは定刻となりましたので、記念センター講演会を始めさせて頂きます。皆様お忙しい中、記念センターの講演会にご参加くださいまして誠にありがとうございます。本日は元中央大学附属高校教員の保坂治朗先生をお招きして、「目白にあった東京同文書院」のテーマでお話頂きます。それに先立ちまして、東亜同文書院大学記念センター長の藤田佳久先生より一言ご挨拶がございます。よろしくお願いいたします。

【藤田】　皆さんこんにちは。只今、ご紹介がありましたように今日は保坂治朗先生に「目白にあった東京同文書院」というお話をして頂きます。われわれ東亜同文書院大学記念センターといたしましては専ら東亜同文書院の研究をしておりまして、東亜同文書院ができる直前に、中国の留学生を中心にして東京同文書院の実体についてはあまり知られてなかったのですね。われわれのほうとしても情報がこれまであまりありませんでした。昨年、愛大の東京事務所が霞山会と共に三七階建ての官民合同のビルに移ったので、われわれのセンターが記念の展示会と講演会を開催しました。その時先生に来て頂いて、実は東京同文書院の研究を

なさっているという情報を頂き、これは非常に貴重だということですぐ「唾を付けて」、ぜひ講演をして頂きたいとお願いしてまいりました。そして本日こういう形でご講演頂くことになりました。東京同文書院のお話を聞くのはわれわれ一同初めてのことで、そういう点で非常に関心のあるテーマで、しかも同文書院の歴史的な原形を知る上で貴重なお話になるのではないかと考えております。

実は一一月二日にも東亜同文会の経営した大陸のほうの教育機関のシンポジウムをやりますが、そちらに併せてご発表頂ければよかったかなとも思いますけれども、今日はそれとは別立てで、先生独自のお話をして頂きます。今日はたくさんの資料を作って頂きまして、楽しみにしております。よろしくお願いいたします。なお先ほどお昼に次郎柿を頂きましたので、お名前の「治朗」とは字が違いますけれども頭の中に刷りこまれました。なおこれらの斡旋は本学図書館の成瀬さんに一生懸命やって頂きました。保坂さんとの交渉も一手に引き受けてやって頂いて実現することになりました。そのことだけご紹介しておきます。ということで私のご挨拶に代えさせて頂きます。では先生よろしくお願いいたします。

【司会】 ありがとうございました。では早速保坂治朗先生にご講演をお願いしたいと思います。保坂先生、よろしくお願いいたします。

【保坂】 只今、ご紹介頂きましたように私は東京の小金井にあります中央大学附属高校の教員を一九六四年からやっていまして、二〇〇四年に退職しました。丁度、四〇年間この学校の、それも平凡な、どこにでもいる教員（主に歴史です）でした。とにかく人前に出るとか写真に撮られるとか、目立つことが大嫌いな

保坂治朗

公演中の保坂氏

のです。今、この会との関わりのご説明がありましたけれど、去年こちらで霞山公（近衛篤麿）の展示会があるのを、私の勤めていた学校で聞きまして、そこに僅かばかりの資料を持っていったのが運の尽きでして、あれを持っていかなかったらこんな、と言っては失礼ですけど、こういう場所に立たなくてよかったのではないかと、つくづく後悔しています。

藤田先生から「どうか」と言われた時に、断わる気でいましたし断わったつもりでいました。私は話がものすごく下手です。誰が何と言おうと下手なので、こんな下手な話を、まして今日は二時間ですから、一〇分なら我慢できますが、二時間もお付き合い願うというのは申し訳ない気持ちです。本日は豊橋祭ということで、こんな良い天気の日に屋内でこんな話を聞くというのはある意味でもったいないですね。今でもやめて外でゲームでもしましょうという気分なのです。話が下手な上にこのことについて私はほとんど見識とか知識がありませんので、去年、言われた時は断わったつもりでいたのですが、今年になってそこにいらっしゃる図書館の成瀬さんが電話をかけてくださったときは、所用もありましたのでお断りしたのですが、成瀬さんは大変粘り強い方で、止むを得ずお受けしました。

私が定年で辞めたのは二〇〇四年ですけれど、その二年前頃から私の勤めていた学校の校史、まあ中央大学附属高校と言えば世間ではかなり立派な学校（虚名ですけど）だから校史ぐらいあるだろうと思われてい

る方がいますが、私立学校の裏側というのは必ずしも立派なものではなく、まとめた校史もありません。そこで、当時の校長に呼ばれて校史を書けと言われました。正式には断わりましたが（私は断わるのが好きなので）、「ただし学校の費用でやると責任があるので、自分の趣味でやるならできますよ」と言い、職務ではなくという条件で二〇〇二年から校史のための資料収集を始めました。

中央大学附属高校が現在の武蔵小金井の地に移ったのが昭和三八年（一九六三年）、私が勤め始めたのがその翌年で、中央大学附属高校そのものが僕の人生と一緒ですから、だいたい書けるのですけれども。中央大学附属高等学校というのは、その前は中央大学杉並高等学校という校名でした。中央大学杉並高校は私の恩師の鈴木俊という著名な東洋史学者が校長でしたので知っていましたから、それもある程度書ける。問題は「中大」の冠の無い「杉並高校」というのが戦後ありまして、それが昭和二七年（一九五二年）に、どこの私立学校も戦後そうなったのですけれど、特に頭に冠の無い学校は大変で、生徒が来なくなりました。たまたま中大の理事が、戦後、大学予科が無くなるので附属高校がほしいということで、潰れそうな「杉並高校」を事実上買収して「中大杉並高校」にしました。

そこからは、ある程度書けるのですが、問題は中大に関係のない時代の杉並高校、その前が旧制杉並中学、その前が今日のテーマの「目白中学」ということで、これは全く分かりませんので、やっぱりやめようかと思いました。二〇〇二年に作業を始めてから、一応古い資料を探しましたが、旧制杉並中学、その前の旧制目白中学の資料は本校には皆無に等しい状態でした。あったのはごく僅かの卒業アルバムで、杉並中学は少しあったのですが、その前の目白については、あったのが今日皆さんにお渡しした資料の中の写真、これは

東京同文書院があったことを示す、オーバーに言えば本校に残された唯一の資料でした。「民国三年七月留日同文書院全体撮影」。日章旗と五色旗があります。中華民国は後に青天白日旗になりますけれど民国の始めはこの五色旗を使っています。その旗の前に当時の教員と生徒が写っている写真です。廃棄寸前でしたがこれが出てきました。私が調べ始めた時は資料といえるものは、ほとんどこれだけでした。

そのあと、日白中学時代のアルバムが四～五冊出てきました。その中に配布プリントの一番上にある二つの写真、今日、実は白状しますと、今日の講演会のパンフに使ってある写真には、からくりがありまして、嘘なんですね。あえて嘘の写真を載せました。日白にあったというと、このような姿で日白にあったと皆さん思われると違います。パンフビラの写真は練馬の校舎です。これと同じものがプリントの右の写真で、校門に日白中学校と東京同文書院と書かれている、これを使っています。では本当に日白にあった校舎はというと左側の写真です。一見、非常によく似ています。うちの教員達に見せるとたいていの人は同じものではないかと思うのですが、よく見るとやっぱり違うのですね。本来なら今日のパンフビラには左のものを使うべきなのですが、あえてこういうふうに使わせてもらいました。別のプリントの上のほうに練馬中学校の写真があります。日白中学（東京同文書院）の校舎が練馬に移ったのは昭和元年（大正一五年）ですけれども、移ってから（当時は板橋区で、練馬区はなかった）、昭和一〇年になくなります。学校としての機能がなくなって廃校になり、私はそこで校舎を潰したのかなと実は長いあいだ思っていましたけれど、インターネット等を使ったりしていろいろな情報を探しましたら、あの校舎は他の人の手に渡ったとありました。ある鉄道学校が買ったという話もあるのですが、その鉄道学校はどこなのかはまだ分かっていませんので、もしそ

ういう情報をお持ちの方は教えてほしいのです。この校舎は鉄道学校の後、昭和一八年頃、官立無線電信講習所になりました。この講習所は東京の電通大学の前身です。現在、電通大学の古い卒業生の中には、この校舎を懐かしむ方もいらっしゃるようです。この校舎、戦後どうなったのか、潰したのかなと思っていましたら、これも偶然ですが東京に練馬中学というのがありまして、今は鉄筋の普通の校舎なんですが、そこの資料室に同じ校舎の写真がありました。これが、そのコピーです。練馬中学の校舎になっていました。大正になってから造り替えた目白中学の校舎は戦後、練馬中学まで使われ、昭和二〇年代に壊されて、この校舎はこの世にないのです。目白中学はそういう歴史を辿ってきました。

目白にあった東京同文書院の校舎は、最初に申し上げましたように、資料二枚目の上の、左手の校舎でした。どちらにしても大変モダンで風格があるというか、たぶん当時は目白で威容を誇っていたのだろうと思います。目白中学については残された資料はこの写真だけだと言いましたが、いろいろなところを探すと、どこからかゴミのようになった文書が出てきます。そういうゴミの中から目白中学の設立申請書が、これもほとんど廃棄寸前だったのですが出てきました。目白中学は明治四二年（一九〇九年）に設立されました。明治時代、東京には多くの中学校ができます。有名な麻布中学を含めいろいろな中学ができましたけれど、侯爵という爵位を持った人が校長という学校は、男爵の神田乃武が校長の正則中学を除けばこの目白中学だけでした。侯爵様の校長というのは特別な格を持つようでした。申請書に設立者、細川護成他一名とあります。これが今日のメインなのですが、他一名というのは柏原文太郎です。柏原文太郎についてはあとで少し時間を頂きたいのですけれども、細川護成と柏原文太郎が文部大臣小松原英太郎に申請してできたのが目白

中学です。これが一九〇九年ですので、今年で満九九年です。中央大学がこの歴史を大事にしてくれるなら、中大附属高校は来年、満一〇〇周年になるわけです。ところが、日白中学からの一〇〇周年を認めたがらない人もいて、日白なんていうのはもう消えた学校だから、一〇〇年史にするかどうかで、ちょっとまだ難航しています。とにかく私がいた学校の端緒がこの日白中学だとすれば、まもなく一〇〇周年だということです。

こんなわけで、日白中学ができるのですが、そのことを少し当時の背景の中でお話ししたいと思います。長いあいだ歴史教師をやってきたものですから、つい年表というものを作りたくなります。最初にお配りした「東京同文書院・日白中学」と書いてある年表は中大附属高校一〇〇年史のために作ったもので他の条件は入っていませんから、追加年表と両方をご覧になって頂くと説明が分かり易いかと思います。年表を追ってみると、初代の校長は細川護成、旧熊本藩主細川護久の長男です。ただこの方はいわゆる正妻の子ではありません。長男なのですけれどもいわば妾腹のお子さんです。翌年に柏原文太郎が生まれています。柏原は「成田歴史上の一〇〇人」の一人ということで、調べ始めた時に柏原文太郎の名前しか私は知りませんでした。校内では「かしぶん」と言われていて、何かすごい人かなあ、ぐらいだったのですが、調べ始めてみると今の私の気持ちでは「柏原文太郎伝」とかいうのが出ても不思議ではないほどの人物なのですね。空港のある成田市の新勝寺、あの近くで生まれたのです。数年前に成田市が柏原を顕彰する意味で、これは成田市の広報紙ですけれども、こういうものを市内で配ったようです。簡潔に書かれていますのでちょっと読んでみます。

「日中親善と東南アジア民族の自主独立に生涯をかけた政治家」こういう見出しに最初は誇張があるのではないかと思ったのですけれど、誇張どころではなく、彼の活動を調べてみると命をかけている、そういう人ではないかと思います。彼は成田の寺台というところに生まれて、早稲田の前身の東京専門学校に入ります。この人が早稲田の出身であるということから、これから出てくる人脈は早稲田の人間が非常に多いのですね。それが影響としてあります。早稲田大学でいわゆる「大隈賞」（優等賞）をもらった方で、早稲田の陸上部の生みの親ではないかという人です。早稲田の学生のために舎監をしたり、英語の本を訳したりとか、大変な秀才で、そういう彼の才能を見込んで大隈重信とか犬養毅が認め重用します。私は社会科の授業で犬養毅をよく教えるのですけれど、彼と柏原文太郎がこんなに近い関係だということは初めて知りました。柏原は犬養毅の股肱之臣というべき人だったのですね。柏原は日本に亡命して来た康有為を今の早稲田大学の近くに家を借りてやったりして助けています。康有為はある意味、あの孫文以上の人物なのですね。柏原と康有為の交流は生涯続きます。柏原の交友関係では、ヴェトナムの独立の志士ファン・ボイ・チャウ（潘佩珠）も注目されます。彼はヴェトナムの孫文と言われるような人です。柏原は日白中学の設立者で教育者であると同時に政治家で、千葉県から出て衆議院議員選挙に合計四回当選して代議士になっています。ただ、なぜ五回目に落選したかというと、原敬、皆さんよくご存知ですね、原敬というと庶民宰相だから、庶民の味方だとみんな思っているし、一部、私もそう思うのですけれども、この人が小選挙区制を導入してしまいました。小選挙区制になると一位以外は全部落ちるわけです。柏原は大選挙区とか中選挙区の時は当選したのですけれども小選挙区制で落ちてしまい、四回で辞めましたが、どちらにしても犬養を支える千葉県選出

の国会議員として大変活躍しました。成田市の広報の説明は日白中学を建てて云々と書いてあります。成田へ行って調べたのですけれど、この人のことを知っている方が、「柏原文太郎さんが偉いのではなくて、安喜子さんが偉いのだよ」と、妻の安喜子のことばかり言う。もしかしたら安喜子さんのお陰で柏原は活動できたのかなあと思ったりしました。

柏原は明治二六年に東京専門学校（早稲田）を出て、犬養の紹介で近衛篤麿に会う。明治二九年（一八九六年）に東京専門学校の講師兼舎監になる。もし柏原について今日の話で関心をお持ちになった方がいらっしゃいましたら、成田の新勝寺のそばに成田山仏教図書館というのがあって、そこには彼についての資料が多く所蔵されています。柏原文太郎が翻訳した『国民銀行論』というのがあります。まだ若いのにあれだけのものを翻訳したかということで大変驚きました。ですから柏原は政治家であると同時に相当な語学力もあった人です。

一八九七年に東亜会が発足。これに触れているとまた長くなりますけど陸羯南、三宅雪嶺、志賀重昂と、これは大雑把に言えば愛国心を日本人にと、ヨーロッパの侵略には負けないぞという青年をつくろうという人達だと思います。一八九八年に同文会ができた。たぶんこの愛知大学にも九八年一一月二日を特別の日と思っている方がいると思いますけれど、この日、東亜会と同文会が合併して東亜同文会が発足しています。この東亜同文会を根っこにして翌一八九九年、中国人留学生のために東京に東京同文書院が開校します。今、東京同文書院のことを知っている人は皆無に等しく、インターネットで調べても東京同文書院の情報は入ってこないのです、今や幻の学校となっています。しかし、先ほど藤田先生が言われましたように、東亜同文

書院創立の二年前にでき、その姉妹校であったということは相当な意味があったのだろうと思います。

一八九九年になぜ東亜同文会が東京同文書院をつくろうとしたか。日本に中国の留学生が来るようになったのは、大雑把に言えば中国が日清戦争に負けたからです。そして一番留学生が多かったのは日露戦争で日本が勝った頃です。私は世界史の教師を長くやっていまして、生徒にいつも、「バルチック艦隊は負けた。ロシアというのは強い国だったのに、それに日本が勝ったということは、いろいろな見方はあるけれども、とにかくすごいことだ」と話してきました。アジア人に与えた影響、インドのガンジー、ネルーとか、インドネシアのスカルノとか、中国の孫文とかには驚天動地のことでした。若い方がいらっしゃいますけれど、今、私達が思っているほど当時の日本は大きな強い国ではありませんでした。極東のちょっとした島国なんですね。それがあの大ロシア、日本の数十倍の土地を持つ国に勝ったという驚きは、ヨーロッパ人に虐げられていたアジアの人々にとっては本当に驚くべきことだったのです。日本は一躍アジアの光と言いますか、そういう印象を持たれたのですね。個人的に言うと、この時が日本の分かれ道だと私はよく思うのです。その時のアジアの人達の気持ちをずっと繋ぎ止めていたら、今の日本はどんな国になっていただろうと。この資料には出ていませんけれど朝鮮の人達にしても、あるいはヴェトナムの人も、あるいはフィリピンに住んでいる人々も、この日本の勝利をだいたいみんな歓迎したわけです。白人の支配が終わるのではないかと。しかし、日本はこの期待に背を向けてしまいました。

一九〇五年は日本にアジア人、とりわけ中国人の留学生がいっぱい来ました。どれぐらい来たかという数なのですが、早稲田大学の教授・実藤恵秀さんがいろいろな数字を挙げています。少なく見て八〇〇〇人、

多く見て一万人ぐらいの人が来たと。東京の神田界隈にいっぱい集まっている。大変な数ですね。日本に来て有色人種のための革命をやろう、みたいな熱気に溢れていたと思います。ここが一つの境目になります。

当時の清朝が日本に留学生を派遣するようになったのは、日清戦争で日本に負け、悔しいけど日本に学ぼうということで、中国人の中にも日本に留学生を送ろうという動きがありました。個人的なことですが柔道の嘉納治五郎に少し関心があります。嘉納さんは柔道・柔術だけではなく、大変な教育者だったのですね。教えることが大好きな方だったようです。それが留学生のための学校（塾でしょうけれども）、亦楽書院というのをつくるんですね。亦楽、もしこの中でちゃんと読み方を知っている方がいらしゃいましたら教えてほしいのですけれど、一応「じらく」と読んでいます。なぜ「亦楽」なのかと思ったら、いかにも嘉納さんらしいのですが、「朋あり遠方より来る、亦楽しからずや」から取ったようです。そこに、ほんの数人の学生を入れて。それがどうも清国（中国）人の教育機関の嚆矢（初め）だったようです。

それが明治二九年で、その二年後、中国は大変な時代になりました。戊戌の変法、光緒帝が何とか中国も「明治維新」をやろうとしたのですが、悪名高い西太后がこれを失敗に陥れます。変法派の康有為、梁啓超らがいわば中国の明治維新をやろうとした。この梁啓超というのは大変な方で、学者としても超一級だと思います。その二人が変法派であるということで西太后に追われて日本に亡命してきます。それを柏原文太郎が親身になって守ってあげた。戊戌の変法は西太后のクーデターで弾圧されるのですけれど、やはり中国の近代化をどうしてもなさねばというので洋務派（中体西用）の張之洞（両広総督）は日本への留学を勧め、そのために近衛篤麿に会います。「中国の子供を教育してくれないか」という張之洞・近衛会談で、東亜同

文会は東京同文書院をつくることになります。こちらの大学の資料を見せて頂いたら留学生一三名とありました。張之洞から頼まれた子供を受け入れて、東京同文書院は一八九九年（明治三二年）にできたわけです。最初の校舎は新宿牛込の早稲田の近くにできました。どんな建物かは分かりませんが、学校と呼べるようなものではなかったようです。それでも嘉納治五郎の学校、あるいは東京同文書院というように徐々に中国人留学生を受け入れるところができたのですが、明治三三年（一九〇〇年）にあの義和団（排外主義）の乱が起きて、彼らが北京を包囲する。日本を含む八ヶ国軍が北京を総攻撃する。日本に来ていた清の留学生はいたたまれなくて帰ってしまう。日本留学はこの動乱で頓挫するのですけれど、これが終わると、また勉強しようというので二年後にかなり増えてきます。明治三五年には清国の留学生五〇〇人ぐらいが来て、神田駿河台に清国留学生会館ができました。会館といっても大した建物ではなかったと思います。この年、東京同文書院は神田錦町に校舎を造って、少しましな校舎になって、徐々に学生は増えてきます。留学生のための教育体制は少しづつ整備されてきました。愛知大学の資料を見せて頂くと、一九〇三年第一期東京同文書院の卒業式があって、卒業生にはどんな人がいるのかなというのが私の関心事だったので、調べてみて驚きました。陸宗輿、劉崇傑という名前がある。私は五〇年ほど前、学生でして、大学で「五・四運動」のレポートを書かされていました。そこに書いた陸宗輿を思い出し、陸が東京同文書院の卒業生と知り驚いた次第です。陸宗輿は後に中華民国の時代に偉くなって駐日公使になり、大隈さんとか犬養さん、あるいは資本家の渋沢栄一と昵懇になります。中国人から見れば陸宗輿は完全な親日の官僚です。第一次世界大戦が始まると日本は中国に対華二一ケ条という、今から思えば言わなければよかったというようなひどい要求を中国に突

きつける。その時の日中交渉の中国側の代表に陸の名前があるのですね。彼は一九一九年の五・四運動で糾弾され退任します。当時の北京大の学生は曹汝霖、章宗祥とともに陸宗輿を売国奴の一人として糾弾し、罷免してしまいます。東京同文書院卒業の秀才が、後に中国では残念ながら売国奴と呼ばれてしまったわけです。劉崇傑も駐日公使館参事を経て民国外交部次長になる有能な人物だったようです。

話は戻りますけれど、とにかくこの頃、留学生がどんどん増えますので、今、東京に語学校ができるように、質が悪かろうと何だろうと語学校をつくれば儲かるというので、東京には中国人に日本語を教える学校が多くできます。東京同文書院の他に早稲田、法政、明治などの大学にも留学生のための促成科ができ、そこにも学生が集まってくる。そして、さっき申しました日露戦争の勝利で東京を中心に大変な数の中国人が集まる。この頃、清朝は隋・唐の昔からの科挙を廃止します。すると中国の若者は日本にどうしても勉強に行かなければならなくなります。ところが、清朝政府の東京にある大使館が日本政府に対して、留学生の中に相当過激な奴がいるから取り締まれ、ということで日本政府は「清国留学生取締規則」というのをつくるんですね。真面目な清国の留学生にしてみればとんでもない中身なのですけれども、日本政府と清朝の在日大使館が一緒になって、そういう清国の学生の学問の道を奪うような動きがあると見たものですから、留学生たちは同盟休校で抗議します。その中で一九〇五年の暮れに、法政大学の留学生促成科の学生・陳天華が抗議自殺をする。これがさらに大きな波紋を呼んで、留学生が一斉に帰国します。当然、東京同文書院の学生の数も激減するわけです。しかし、ともあれアジアの人々にとっては憧れの東京でした。ヴェトナムはかなり前に事実上フランスの植民地にされていました。ヴェトナム人の名はご存じのとおり、今は日本ではか

な文字（ヴェトナムではローマ字）で書いていますけれど、かつては漢字、漢文をよく学び、ホー・チ・ミンにしてもよく漢字を書いていました。そういうヴェトナム人が日本に憧れを持って、東遊（トンズー）運動というのを起こしました。先ほどちょっと触れました潘佩珠が最初に日本へ来て、そのあとクオン・デという、嘉隆帝の直系で世が世ならヴェトナムの王位を継ぐ人物が、尊敬する潘佩珠が来たということで来日します。

そして、日本はだんだんアジアを友にするのではなくヨーロッパと手を組むというふうにならざるを得なかったのでしょう、為政者にとっては。日本はアメリカと協定を結んで、アメリカはフィリピンを取ってもいい、その代わり日本は朝鮮を取るよという密約をする。日仏協約、これはフランスがインドシナ三国を取るのを日本は認めるから、日本が朝鮮に手を伸ばすことに文句を言うな、みたいなことになっている。そういう日仏政府の協約によって、当然、日本政府は日本の中にいる反フランス的なヴェトナム人を追放しなければというので、かなり激しい弾圧をすることになっていく。それが一九〇七～〇八年です。

だんだん留学生に対する弾圧が激しくなる中で、一九〇九（明治四二）年、最も多くの中国人留学生を卒業させた、例えば魯迅とか陳独秀を卒業させた嘉納さんの宏文学院（「弘」が乾隆帝の諱なので「宏」に変えた）ですが、三〇〇〇人以上を卒業させたこの学校は潰れ、翌年には早稲田、明治の留学生部も廃止されてしまう。そうすると東京同文書院だけが中国から来る人のための教育機関として残ることになります。そういう意味で良い悪いは別にして東京同文書院の存在価値は一九〇九年に大変高まるわけです。そして目白中学ができたのも、この年です。

一九一一年の辛亥革命、私の想像ですけれども、日本にいる中国人留学生にとっては大変な血湧き肉躍るような喜びだったでしょう。留学生はほとんどが帰ってしまう。もう中国人留学生がいなくなるのではないかという状況でした。ところが、ご承知のとおり辛亥革命では孫文の政権がすぐには確立せず、袁世凱に権力が移ってしまう。せっかく中華民国ができても、若い中国の学生にとっては我慢できなかったようです。また一九一三年頃になりますと日本には留学生が増えてくるという状況です。この時、中国の民国政府は日本政府と交渉して、民国の国益に従ってこういう学生を育ててほしいという依託学生を送ってきます。一九一三年、東京同文書院へ中国各省の依託学生が入って来る。この数はけっこう多くて三〇〇名に及びます。その内一〇〇名近くは武官です。武官という将校軍人になる人が、東京同文書院に入る、そのために、ご存じの村田銃を購入します。誰が彼らに軍事教練をしたかも分かっています。

この一九一三年は孫文の日本への亡命とか、いろいろなことがあった年です。東京同文書院の学生数は二六〇名ほどいました。全在日留学生は五〇〇〇～六〇〇〇人。ところが第一次世界大戦が始まり、先ほど陸宗輿のことで触れましたが対華二一ケ条で留学生が帰る。こうなると中国人で同文書院に入ろうという人がいるほうが不思議になります。だんだん学生数は減り、帰国学生が増える。同文書院学生は一七名になってしまいます。大正七年（一九一八年）に世界大戦が終わる。中国人が民族意識に目覚めて五・四運動が始まる。こうなるともう一年毎に学生の数が減る一方で、遂に一九二二年（関東大震災の前年）、東京同文書院に入る学生はいなくなってしまう。東京同文書院の歴史は一九二二年に終焉したといっていいと思います。不思議に思うのは、一九二二年に東京同文書院は学生ゼロになったのに、なぜ移転した練馬校舎の校門には

目白中学と並んで東京同文書院と書いてあるのかと。もう東京同文書院は無くなっているのに校名はあったのです。配布プリントに「大日本職業別明細図」というのを載せました。昭和一〇年のものです。そこには目白中学も書いてありますし、東京同文書院もあります。学生がいなくなっても柏原文太郎は東京同文書院がここにあるぞということを示している。一九二二年には学生もゼロになってしまっているのに、柏原は練馬に移した学校にも東京同文書院の看板を掲げていた。柏原の心中が何となく察することができるような感じです。

お話したいことがいっぱいあるのですが、時間はあと一時間ぐらいです。本題の東京同文書院の話の前にちょっと変わった資料をお見せしたいのですが。これはたぶん公開するのは初めてだと思います。東京同文書院と東條英機は関係あるのかというと何もないのですけれども、せっかくおいでになった方にお土産話ということで、この話を少しさせて頂きます。そこにいく前にこれを念頭に置いていて頂いて話を続けます。どうも学校の教師をやっていた者の習性で、資料を全部説明しないとまずいという変な義務感があります。いっぱい字の書いてあるところ。これを全部読むと何時間もかかりますから、かいつまんで説明をします。話がまた戻って恐縮ですが、東京同文書院時代、つまり目白中学ができる前の東京同文書院はいったいどんなだったのだろう、どんな先生がいただろう、というのをちょっと調べてみたのですね。そうしたら大変驚きました。

明治三三年の講師に金井保三という、今では知る人が少なくなりましたが『日本俗語文典』『日語指南』などの著書を出した方で、留学生の語学教育の第一人者ともいわれています。

新村出、後に『広辞苑』を編纂する新村さんが、たとえ短い期間とはいえ中国の若者に教えていました。猪狩又蔵、昭和天皇の皇太子時代に教育勅語を進講した杉浦重剛の『小伝』を書き、日本中学校長なった人です。杉浦重剛は東京同文書院と東亜同文書院の院長を短期間やっています。

明治三四年の講師に杉村広太郎という名前が出てきて驚きました。中央大学はもともと英吉利法律学校と言って、日本で英法を勉強したければ東大ではなく、ここへ行けというぐらいの学校でした。杉村広太郎はその英吉利法律学校に入ったということで、中央大学では中大の生んだ偉い人というと長谷川如是閑と杉村楚人冠（広太郎の号）が挙げられています。楚人冠は朝日新聞に入り「日本新聞学」の先駆者で中央大学に新聞学科つくろうとしたといわれています。

次に片山正夫、宮沢賢治を知らない方はいらっしゃらないでしょうけれども、賢治はもともと化学者で、彼の愛読書の中に片山正夫の書いた『化学本論』というのが出てくるんですね。この本は図書館で探して見たことがあります。こんなすごい本を書いた片山正夫さんも中国人に教鞭をとっていたのです。

副島知一、この人は国学院を卒業し熱田神宮、橿原神宮等の著名な神社の宮司を歴任した神主さんの世界では有名な人のようです。

明治三五年、前田元敏、この人を知っている方は少ないでしょうが、東京外語で新渡戸稲造、内村鑑三の同窓で明治・大正時代の英語の世界では大変な人で、英文の随筆が素晴らしかったと言われています。そんな人がここで先生をしていた。

三六年には宮崎民蔵、あの宮崎滔天（寅蔵）のお兄さんで、兄弟それぞれ偉い、民蔵も東京同文書院で短

い期間ですけれども教え、「土地均分」を唱え、孫文と親交を結び辛亥革命に深く関わった人です。

小林萬吾、東京美術学校で黒田清輝に師事し、白馬会に所属し後に東京美術学校の教授になる一流の洋画家です。こんなに優れた画家が中国人に絵を教え、日白中学でも教えていました。

亀田次郎、この人は大著『日本文学大辞典』『国語学概論』などで知られる国語学の大家です。東京同文書院には、そう長い期間ではありませんが素晴らしい先生がいました。

今日の私の話は分かりにくいと思いますので、十時弥（ととき・わたる、九州柳川の人）が明治三八年一一月一九日、東京同文書院の下落合（目白）新校舎開校式で報告した文が次にあります、これをお読み頂ければ東京同文書院の歴史が簡潔に分かると思います。これは十時弥が明治時代の半ば過ぎに書いた『社会学撮要』の表紙をコピーしたものです。中身を見て驚きました。明治時代は儒学とか、どちらかと言うと観念的なものが多かった中で、社会学という社会科学の開拓・紹介者だったのです。この中に社会学の開祖ともいえるオーギュスト・コントのことが書いてあるのです。そういう学者で、日白中学の事実上の教務主任にもなった人ですが、東京同文書院時代から関わっていました。

その次に、先ほどから柏原文太郎のことを申し上げていますけれど、黒龍会が出した『東亜先覚志士記伝』というのが、柏原とヴェトナム（昔は安南とも言った）の関係を一番よくまとめて書いてあると思います。省略すると意味が通じないので一応その部分を全部写してきました。お読み頂ければと思います。柏原がヴェトナムからの若者を大変大事にしたので、ヴェトナム人が柏原夫妻を日本のお父さん、お母さんと慕った。ごく僅かな日本にいるヴェトナム人も柏原に特別な感謝の気持ちを持っていたようです。

同文書院の教頭・十時弥は日白中学を設立してまもなく、第三高等学校の教授になったあと、廣島高等学校、熊本の第五高等学校の校長になっています。十時弥や難波田憲欽（なんばた・のりよし）、この難波田という人は調べると面白いです。ここにも書いてありますけれども日露戦争に参加して胸に貫通銃創を受けて退役した、日露戦争の退役軍人なんですね。それが日白中学に職を得て、今で言えば生徒指導をしたわけです。難波田は東京同文書院に入ってくるヴェトナム少年（もっとも柏原はヴェトナムの少年を全部中国人として登録していました。ヴェトナム人というと捕まってしまうので。顔立ちはほとんど中国人と変わりませんから、名前も中国風にして中国人のふりをさせました）に鉄砲の撃ち方なんかを空き地で教えたと書いてあります。さきほど村田銃を購入し中国人に訓練したと言いましたが、難波田は中国人と共にヴェトナム人の若者にも軍事訓練をしていたわけです。難波田の息子・難波田龍起（たつおき）は父の勤める日白中学に入り図画教師・清水七太郎の指導を受け、後に『火の人』岡本太郎に対し『青の人』といわれる日本を代表する抽象画界の双璧となり文化功労者として表彰されてます。この難波田らに指導された少年・青年達がヴェトナムに帰って反仏運動・独立運動をしようとするんですけれどもなかなかうまくいかなかった。うまくいけばベトナムは独立できたのですが。

とにかく柏原は彼らを本当に慈しんだので、お父さんお母さんといわれました。この文章の終わりに、明治四一年五月、陳東風（彼はヴェトナムでは金持ちの息子だそうです）が日本政府の厳しい追及とか、自分の父親への誤解とかで遂に自殺をするという事件があって、私にはこう話は応えるんですね。そのお墓に十数年前に出かけたのですが、今どうなっているかなと思って、こちらへ来る前にもう一回、早稲田大学近

くの雑司ケ谷の墓地へ行って確かめてきました。「同胞志士陳東風之墓」とありまして、周りのお墓に比べていかにも古く、かなり荒れたお墓でしたけれど、どなたか分からないのですが花を供えてありました。これは最近の写真です。この墓は誰が建て、今、どなたが管理していますかと墓地事務所に聞いたのですが、誰も知りません。それよりもっとひどいのは「困っているんですよ」なんていう。「墓地はちゃんとお金を払って頂かないと出ていってもらいたいのですけれど、なかなかそういう人はいない」と言ってました。

この墓を建てたのは、さっき申しましたヴェトナムの王族クオン・デなのですね。そのクオン・デという人は潘佩珠と違って大変気の弱い方だったのかなと思います。日本に来たり、母国に出かけたりするのですけれども、最後はヴェトナムには戻らず、結局第二次大戦中ずっと日本にいました。クオン・デを日本の軍部が利用して傀儡に、ちょうど日本が満洲国建国で、溥儀を利用したと同じようにしようとする派もあったようですが、クオン・デは見捨てられてしまう。見捨てられたクオン・デは犬養毅とか日本の軍部に助けてもらい母国復興をしようとしたができなかった。戦争が一九四五年に終わって、彼は尾羽打ち枯らした感じで東京に住んでいました。最後、クオン・デは昭和五一年杉並の荻窪で寂しく亡くなります。そのクオン・デがまだ少しお金があった時に、陳東風のために建てたのがこの墓ということです。

その次に目白中学校創立は、資料を見て頂ければお分かりになると思います。

目白中学草創期、著名な講師陣で目白中学は「官立の一中か私立の目白中学か」といわれるほどになります。著名な講師については桂五十郎の名をみて私事ですが驚きました。昔、学生時代、少し漢文を習ったことがあります、今は全く忘れましたけれども、桂の名は覚えています。その桂五十郎は早稲田の出身で、早

稲田大学には漢学の伝統があり、優れた漢学者がいました。桂はその中で三本の指に入るといわれた漢学者です。桂五十郎の『漢籍解題』は中国の古典を大変簡潔に解説した便利な書です。桂は森鴎外の漢文の先生でもあります。

木下利玄、木下藤吉郎（秀吉）の系譜につながっている家なのですね。これもやはり日白中学初期の国語の講師でした。木下利玄は歌人ですね。日白中学で教鞭をとっていたのは四年間ぐらいです。この講師時代、教師として詠んだ歌があるかと思って探したのですが、未だに見つからないでいます。たぶん利玄は教師としては熱心ではなかったのかなというような感じがします。

その次に紀平正美、年配の方で少し哲学好きな方は、西田幾太郎の西田哲学といえばピンときますね、「西の西田、東の紀平」と言って、もし日本が軍国主義でそのままいっていれば紀平のほうが有名になっていたかも知れません。この人は歴史の流れの中で、いわば皇国思想だとか国家主義だとかいうことで否定されますけれど、哲学者としては相当な人で、こんな人も日白中学の生徒に教えていました。

それから清水起正、これも古い英語好きの方は「清水起正の英語」としてご記憶だと思います。

校史をいろいろ調べていて驚いたことがずいぶんありますが、その中でも驚いたのは河合塾です。率直にいって河合塾とか代々木予備校なんていうと、私は予備校が嫌いですからほとんど関心ないんですね。ただ河合塾は昭和八年に河合逸治という人が建てた塾で、それが今日のようになるとは誰も思わなかった。

【渡辺】 豊橋の人です。

【保坂】 そうですね。たぶん、この豊橋でお話をするにはこれが一番うけるのではないかと思っています。

河合塾の創始者で河合逸治。実はうちの学校に目白中学の教員名簿が残っていました。見ていましたら河合逸治とあったので、もしかしてあの河合塾の、と思ったので河合塾に電話をかけたのです。河合塾の方は大変喜んで、さっそく河合逸治伝というのを私に送ってくださった。市販されていない河合塾の創始者の伝記が手に入りました。それで知ったことがここに書いてあります。読んでみて大変助かったのは、同じ校舎の中で、今の中学生ぐらいの中国と日本の子供が喧嘩しないはずはないから、そういう資料がないかなと思っていましたら、河合逸治が英語の主任教授だった時に見たことが書いてあった。ちょっと二～三行読むと、「ある時ふとしたことから、目白中学の生徒と支那人の学生とが喧嘩をして、東京同文書院の学生三〇〇人（この時は東京同文書院の全盛期ですね）のストライキが勃発した」、たぶん中国人が日本人に馬鹿にされていることへの怒りなのでしょうけれども。「私は学校当局者が困りぬいているのを傍観しているのに忍びず、進んで支那学生の慰撫に努めた」と。あとはお読み頂きたいのですが、そんなことがありました。これを跡づけたかったので、当時の新聞をいろいろ調べてみましたら、読売新聞の同じ時期に「目白中学の喧嘩騒ぎ」というのがあって、ちょっと内容は違うのですけれども、どちらにしてもちょうど中国が辛亥革命をやっている頃の中国人学生と、それを迎えている日本人学生の雰囲気を伝えるもので、参考になりました。

これは日中の学生の喧嘩騒ぎなんですが、また別のものを探したので載せておきました。それは中国人が目白中学に入ってどんなことを感じたのかというのを調べてみたのです。その中で民国の要人で湯化龍のお子さんの湯佩松が目白中学に入学し目白中学での経験を回想記に書いてます。「日本へは船で行きました。ちょうど第一次世界大戦の頃でね、天津から一五日かけて行きました。東京に着くと民国の人が迎えてくれ

ました。官邸に住まず市内に部屋を借りました。雑司ケ谷に一戸を借りました。目白中学というのは貴族階級の子供が通う学校です。（細川さんは貴族ですから）云々……」と書いてあります。学校では湯佩松は先生の日本語は少ししか分からなかったけれど、日本人生徒からはそんなに差別は受けていない。特に日本の先生方は差別をほとんどしなかった。ただ、どういうわけか武道、特に剣道は教えてくれなかったと。このことは、何となく分かるような気がします。私は昭和二〇年四月に小学校に入ったのですけど、八月に敗戦となり、アメリカ占領下で柔剣道は禁止されました。アメリカは強い日本人は困ると思ったのでしょう。同じような発想で中国人の湯佩松に剣道を教えなかったのかなと思います。河合逸治のことや読売新聞の記事、湯佩松の思い出などで、少しは、この学校の雰囲気を知ることができます。

最初の校長・細川護成が亡くなると次の校長に異母弟の護立がなります。もし細川家のことをお知りになりたければ永青文庫にお立ち寄りになるといいと思います。山手線の目白で降りてタクシー、または歩いてもけっこうです。「彼は国宝保存会会長、東洋文庫理事長云々」と書いてある中で「文京区目白台一丁目永青文庫」とあります。博物館に関わる人で知らない方はいらっしゃらないと思いますが、早稲田大学からは歩いて行けます。

護立は先年首相をやった護熙のお祖父さんです。体が非常に弱い方だったので目白中学の校長なんていうのは彼にとってはどうでもいいことで、ほとんど学校との関わりはなかったようです。病弱だったということで、骨董だとか美術だとか、文学に大変関心を持っていた。護立は「白樺派の会計係である」と息子の護貞によくもらしていたという、木下利玄、志賀直哉、武者小路実篤はずいぶん助けられていたようです。目

白中学はそんなわけですごい先生方、あるいは侯爵様の学校ということで発展し、大正一四年の全国中等学校野球東京大会決勝で早稲田実業に敗れたとはいえ、甲子園一歩手前迄進んだこともあって順風満帆という感じなのですね。先生方は創立期の十時弥が去ったあとは『日本倫理史』などの著書で知られる倫理学者の有馬祐政。それからギリシャ・ラテン語に興味のある方はよくご存知の田中秀央、『羅和辞典』の編纂者、この人がいなければ日本のラテン語の研究はずいぶん遅れたと思います。田中は若い時は生活に苦労していました。そこで目白中学の英語の講師となったわけです。田中は五年間ほど目白中学の講師したあと他の学校に移ることになり、目白の後任に友人の金田一京助を推薦しました。実はこれを調べたのは、金田一京助が目白の先生になったいきさつが分からなかったからです。たまたま田中秀央に関わる本を読んでいましたら『自叙伝』にこのことが書いてありました。金田一京助はいうまでもなくアイヌ学とか国語学とかで知られる学者ですね。目白では英語を教えていました。目白中学はこれらの優れた先生方のおかげで何人も優秀な卒業生が出しています。今日の皆さんの中にキリスト教徒の方がいらっしゃるかどうか分かりませんが、いわゆる新教プロテスタントの世界では有名な熊野義孝という人がこの学校の卒業生です。興味のある方はあとで読んで頂ければと思います。熊野は東京神学大学の教授を長年勤め日本を代表するキリスト教神学者になります。その足跡は『熊野義孝全集』一二巻に収められています。

何人もの卒業生の中でもう一人、杉木喬（よく杉本と間違えられますが）がいます。一時、日本の学生によく読まれたコールドウエルの『タバコロード』を翻訳した人です。

それからアカデミックではないところで、中央大学の附属になってから同窓会会長をやってくださった中

嶋忠三郎という人がいます。ご存知の方はいらっしゃらないと思いますが、ただ、この人の書いた『西武王国』という本が数年前に本屋に山積みになって意外によく売れました。近年、堤康次郎とその子供達の会社が破綻します。現在、堤康次郎といっても知る人も少なくなりましたし、知る人の中には彼に好意を持たない方も多いと思いますが、好き嫌いを抜きにすれば鉄道・都市計画・住宅建設などの事業家としてはやはりトップレベルの人だったと私は思います。堤康次郎は早大出身なのですね。日白は早稲田大学に近い。堤は苦学している中嶋忠三郎に、「お前が自分の家へ来れば学費はいつでもやるよ」と言ったという。それで中嶋忠三郎は堤康次郎を尊敬するんですね。そんなわけで中嶋と堤の関係ができます。

お話してきた、これらの先生方以外にどんな方がいたのだろうと資料を見て頂きますと、羅列で面白くないのですが、今井喜孝、生物学・遺伝学で知られた人。あと飛び飛びでいくと長谷川貞一郎、この方は学者としてはそれほどの評価はないのでしょうけれど夏目漱石と熊本の五高で同僚だったとか、そういう人もいました。それから僕は歌が歌えないのですが聞くのは大好きです、「遠足」という童謡（唱歌）の作詞家が佐野保太郎、丹波篠山の出身で山形高校、高知高校の校長を歴任した方です。早稲田の教授で日本英文学会会長にもなった目高只一が英語を教えていた。受験英語で有名な野原三郎も教えていました。受験勉強で苦しんだ方は覚えておられるかも知れません。ここにある三〇名ほどの講師はそれぞれの分野で名を残す学者でした。日白中学の先生は今の名も無い普通の高校の先生とは比べものにならない大先生ばかりでした。

先ほど、お土産話とか言いましたけれど、清水七太郎と東條英機と何で結びつくのかということをお話しして終わりたいと思います。

金田一京助、国語辞典をつくったりして私達にとっては神様みたいな人です。金田一さんはいうまでもなく石川啄木の親友ですね。その後輩に宮沢賢治もいますね。三人とも盛岡中学の出身です。盛岡に行きますと先人記念館という啄木とか金田一とか賢治を顕彰する建物があります。これは先年、私がそこに行って得た情報です。

目白中学の絵の先生は、たぶん専門家でもほとんど知らないと思うのですけれど、目白には赤い鳥社（童謡や童話に詳しい方はご存じでしょう）というのがありました。大正デモクラシーを象徴するものの一つが目白通りにあった鈴木三重吉の赤い鳥社なのです。赤い鳥社は『赤い鳥』という雑誌を出します。その赤い鳥社と目白中学は道路を挟んで歩いても何分のところにありました。当時、目白中学に就任してきた清水七太郎は盛岡中学出身で啄木の後輩になります。盛岡の先人記念館に行きますと清水七太郎の画と経歴が展示されています。清水七太郎は目白中学で画を教えながら、生徒に画を描かせて雑誌『赤い鳥』に送っているんです。いつか『赤い鳥』を開けて頂けると、目白中学の生徒の絵がずいぶん載っています。『赤い鳥』の挿絵画家は清水良雄が有名ですが清水七太郎は彼とは友人ですが、良雄ばかりが有名になって、七太郎のことはほとんど世間では知られていません。もう少しは知られてもいいのではないかと思います。彼の絵そのものはそれほど超一流ではないのですが、独特の雰囲気をもつ画風です。東京美術学校の西洋画科を出て文化服装学院の前身の先生、目白中学の講師をやったりしました。彼は目白中学の在職中に毎年のように教え子を東京美術学校に送り出しています。さきほどの難波田龍起の他に児童教育画家の湯川尚文、東京美校を首席で卒業した彫刻家の片山義郎も七太郎の教え子なのです。東條英機と清水七太郎の関係はといいますと、

東條英機自身は東京育ちなのですけれど、お父さんの東條英教は盛岡藩士の出身です。会津とか仙台とか東北地方の人達はみんな薩長に対する反発もあって一生懸命勉強していたのでしょう。盛岡出身の東條英教はやはり一生懸命勉強して陸軍大学を首席で出たのですが、東北出身なるがゆえに陸軍大将になれなかったようです。その悔しさを抱いて息子の英機が後に首相になるわけです。私は英機と言えばヒトラーかムッソリーニみたいな感じなのですが、彼個人の書いたものを読むとどうもヒトラーとは違うようです。東条と清水との関わりは、清水が自分の子供を戦争で亡くします。そんな中で清水七太郎が東条に画を贈っています。これは盛岡市先人記念館で見せてもらって、写真に撮ってコピーしたものです。漢文調です。文中の最明寺入道は鎌倉幕府の執権で北条時頼のことですね。それを清水が描いて東條英機に贈った。それに対する感謝状です。この書状の下に東京裁判での英機の姿がスケッチされています。その時、七太郎はたぶん市ケ谷の法廷に行ったのでしょうね。スケッチが二～三葉残っています。それがその一枚です。これだけは、本邦初公開だと思います。

目白中学の全盛期は大正の中頃から終わり頃で、柏原自身は中国に出かけて学校を建てたりして、病気になったりと、ほとんど目白中学にいないのですが、学校はどんどん良くなって八〇〇～九〇〇名という、当時としては大きな学校になっていました。これは、やはり良い先生がいたからですね。受験生のバイブルとされた『代数初歩』『幾何精義』の著者・岩切晴二、学習院女子高等科長になり『高等数学提要』などの著書がある古賀軍治とか有名な人が先生がいたからです。このままでいけば麻布や開成のような名門校になっていたかも知れません。ところが、近衛篤麿さんが早く亡くなって後を継いだ文麿さんは大変な土地を持っ

ていました。その一部に東京同文書院（日白中学）を建てたのですが、華族の生活は派手ですから意外に財政は厳しいようで土地財産を処分せざるをえなくなります。そこに日白中学とその周辺の土地を買う人が出てきました。それが堤康次郎で箱根土地株式会社（後のコクド）の名で土地を買収し日白文化村（大正時代らしいネーミングです）というのを分譲します。そこへ近衛家は日白の土地を売ってしまいます。名門校になった日白中学ですが、校地を売られてはどうしようもなく練馬に移転しました。今はもう練馬は人口密集地ですけど、当時は田畑も多く人口はまだ少なく通学には不便でした。しかし移転時は日白時代からの生徒がまだいたので何とかやっていけましたが、入学試験のたびに受験生は減り、そのうえに昭和恐慌が重なってしまい、昭和八年～九年になると、最後は受験生一人ということになりました。その頃、柏原の病は重くほとんど動けないということで校長を退き、まもなく亡くなるわけです。昭和一一年八月一〇日、六七歳で永眠し、成田の永興寺に葬られました。

柏原文太郎について、私との関わりで驚いたことがあります。それは、柏原には実子がいないので養子が継ぐのですが、私の通った東京池袋の中学の一年後輩に柏原という人がいました。先年、その柏原君が「実は僕の父は柏原文太郎だ」と言うのを聞いて驚きました。私は校史の資料収集を始めるまでは柏原文太郎のことはほとんど知らず関心もありませんでした。知り始めて見ると柏原の存在の大きさと共に何やら私と深い縁があるような気がしています。柏原文太郎がいなければ東京同文書院はともかく日白中学は存続されず、したがって私が勤めることになる現在の中大附属高校は当然存在しないわけですから。これで今日の私の話を終わらせて頂きますが、もし何かご質問がありましたらどうぞ。どうも長時間ありがとうございました。

【司会】　保坂先生ありがとうございました。東京同文書院、日白中学校についての貴重なお話をして頂きました。本日配布されたレジメのプリントを拝見しますと、詳しくまとめられておりまして、保坂先生のご研究の深さが窺えるように思いました。ではあと一〇分ほど時間が残っておりますので、質疑応答に移りたいと思います。ご質問等ございましたら挙手をお願いします。

【田崎】　事実関係ですが、細川護成と長岡護美の血縁関係はどうなりますか。

【保坂】　叔父さんです。もともと細川家なんですね。長岡家に入り子爵になってます。この細川家の人はほとんど「護」という字を入れますね。私も長岡護美のことは詳しくないのですけれど、本を読んでいるとよく出てきます。東京同文書院院長もやっています。

【田崎】　もう一つ、桂五十郎は新潟の国学者の一人ですが、平田国学で有名な桂誉重の系譜ですか。かなり有力な地主さんと言うか。

【保坂】　それはちょっと、よく分かりません。そうかも知れませんね、豪農の家です。ただいい加減なことは言えませんので調べてみます。それから今日少しお持ちしたのですけど、東京同文書院についての資料は本当に少ないんです。宣伝になりますけれど、ここの愛知大学の資料はすごいですね。私が研究者ならこちらに移住して二～三年、ここに留学したいくらいです。先ほど記念センターで見せて頂いた孫文の資料はたぶん日本で一番か二番かあるのではと思います。

【藤田】　それぐらいあるかも知れません。

【保坂】　私もさっきよだれが垂れるようなのを見せて頂いて、この近くにお住まいの方が羨ましいと思い

ました。これは本物ですね。東京にも多くの資料がありますがたいてい偽物です。そういう意味で大変参考になりました。だいたい学校は途中で潰してはだめですね。目白中学について調べてみるとなかなかすごいのですけれど、潰れそうになってしまうと、その学校の教員はみんな逃げ腰になるんですね。資料を整備保存してから出ていこうというような先生はまずいません。ですから目白中学が潰れた時には文書などはほとんど廃棄してしまいました。そういうことを聞いています。現在も日本中で学校が潰れたりしますけれど、学校の文書、教材、書籍などは文化財なのですね。潰れそうな学校の文化財もどこか保管するところがないかと思います。目白中学について残されているのは、先ほどの写真と、私が探し出した反古紙化した校舎の見取図と、こういうものしか残っていないのです。東亜同文書院についての資料保存、愛知大学がぜひ永久に続けて頂ければ、この地域のためにもなるのではないかと、ちょっと生意気ですけどそう思いました。

【渡辺】 愛知大学は昭和二一年の開学でございます。実はオープンの記念式典の時に、先生のお話に出てきました例の朝日新聞で天声人語を書いて、長いことジャーナリズムで親しまれました長谷川如是閑先生が、オープンの時の記念講演をされています。それが学校と先生のお話とが有力に結び付く一つではないかと思います。なお長谷川如是閑さんがここでされた講演について質問しましたら、研究していらっしゃる先生がお見えになって、実は愛知大学の新聞部がその内容などを収録している。長谷川先生の記念講演の速記録が残っているようです。まずこのことが一つ。それからもう一つ、これは先生のお話に出てまいりました河合逸治さんのお話ですが、河合先生は確か名古屋高等商業、第八高等学校の英語学の先生をしてみえまして、ドイツに第一次欧州大戦の直後に留学をされました。ドイツの猛烈なインフレを経験してみえて、河合先

生が何をやられたかと言うと、送ってきた資金は全部本屋へ行って、自分は食うや食わずでも、古本を丸ごと本棚ごと買ってはどんどん日本へ送った。これが第八高等学校や名古屋高等商業の原書のコレクションになっていったわけです。河合逸治先生は第二次欧州大戦が勃発してヒトラーがポーランド進撃を始めた時に、塾生をみんな集めてこのような講演をされました。

大変な事態が起きたと、塾にある金額を全部持っていって紙を買いました。印刷の機械を揃えました。どんなに戦争が苦しくなっても絶対にこの塾は閉じません。最上級の西洋半紙を配られました。そのようにして河合塾に学ぶ人間だけは河合先生のお陰で紙に困らずに終戦を迎えたわけです。終戦後、私が市の公会堂の勤務をしておりました時に河合先生がお見えになって、これからこの施設を利用して郷土のために何か事業をやりたいが相談にのってくれというお話がありましたので、河合逸治先生が豊橋の出身者であることを確認しました。この話は私の人生と結び付くことでございます。まあ年ばかりとっておりますが。

【保坂】 いえいえ、ありがとうございました。僕のまずい話が長引いて後の祭なんですが、ほんとは一時間ぐらいかけてこういう話をしたほうがいいですね。中央大学は皆さんにとってどれぐらいイメージがあるか分かりませんけれど、学内で問題なのは、早稲田の大隈とか慶応の福沢みたいな人物が中大にはいないのですね。創立一二〇周年ということで何とか中大の名前を高くするような人物を顕彰しようと、長谷川如是閑についてずいぶん研究させて学内に広げようとしたのですけれど、なかなかうまくいきません。私も長谷川如是閑については関心があるものですから、今のお話大変参考になりました。こちらで講演された如是閑の記録が残っているのですね。河合逸治さんのことはこの校史を調べて初めて知りました。大変偉い人です

ね。

【今泉】　一つだけお伺いします。目白中学校は今の設置の写真でよく分かりましたが、同文会の記録では「目白中学校なる日本学生部を併設し…」という、東京同文書院のほうの記述がありますが、これについてお教え願いたいと思います。

【保坂】　こういうことは観念的にお答えできませんので、これもこの講演のために少し前こちらに伺って大学の資料を見せて頂いた時に出てきたものなのですけど、このようにに書かれています。明治四二年の東亜同文会の報告です。東京同文書院の中学併置「本会は東京同文書院に中学を附設して、日本学生をも養成するの必要を認め二月五日評議委員会に提議せしが、評議委員会は更に細川、曽我、伊沢、池辺、沢柳、箕浦、中西の七評議員、大原、柏原、両幹事を擧げて調査委員となし、委員調査の結果により、二月一六日、再び開会し該提議を承認せり、是に於て侯爵・細川護成氏の名を以て中学設立を文部省に申請せしが、三月三〇日認可の通知に接したるを以て、愈、四月一日より学生募集を開始し同四月一日開校式を挙行せり」と書いてあって、「附設」となっています。私の調べた限りでの文書はこういうことです。

【司会】　ではもう一方だけ、最後のご質問ということで。

【藤田】　非常に細かくお話し頂いて大変ありがとうございました。われわれも改めて、目白中学と併せて再認識させて頂きました。お互いの関係みたいなものはなかなかむずかしいですか。たとえば目白中学の著名な先生方が、書院のほうとどう関わったか。授業をしたとか。

【保坂】　いや実はそれは私がお聞きしたいぐらいです。先ほどの例の湯佩松という人の文章を読むと、

同文書院の学生は中国人の彼を意識していなかったように書いてありますので、そんなに学生間には境界はなかったのではと思います。日白中学の古い卒業生に一人だけにお聞きしたのですけれど、その時はもう中国人学生はほとんどいなくなっていましたので、大正初めの三〇〇人ほどいた時の教室などの雰囲気は正直いって分からないですね。分からないことだらけなのです。何故、同文会が日白中学と東京同文書院の経営から手を引いたのかとか。同文会と柏原との間を往復した文書がありますけれど、とにかく財政難ということで、同文会は日白中学と東京同文書院を切り捨てたのではないかと思います。その後、日白中学も東京同文書院も柏原個人のものになります。日白中学はその後も学生数は増えていきますが、東京同文書院は大正一一年には学生数は零となり事実上消滅します。しかし柏原は無くなった東京同文書院が在るかのように、校門には日白中学校と並列して東京同文書院の看板を外しませんでした。昭和初期の板橋区の地図には東京同文書院と書きこまれています。東京同文書院は法制上は存在し続けたことになります。柏原が廃校届を出すのは昭和八年のことです。東京同文書院は柏原と共にあった学校です。それを法的にも完全に消滅させるのは耐えがたかったと思います。その二年後には日白中学も無くなります。

【藤田】 先ほどの図面で言いますと、校舎の中で両方が接合できそうな設計は見られるのですか。

【保坂】 どうもこの図面の校舎は増築のようですね。明治三八年の東京同文書院校舎建設以来、日白中学の設立、学生の増加などで何回か増築しています。この図面では書院生用の教室は一室だけです。書院生がどんどん減ってしまったからだと思います。このことは、まだ新しい資料が出てくればと。愛知大学の隅っこにないかなと思っているんですが。

【藤田】　われわれのほうもいろいろ気を付けてみます。ありがとうございました。

【保坂】　私は先月、角川文庫の『クオン・デ　もう一人のラストエンペラー』（森達也著）という本を買いました。今日、私がお話ししたことがほとんど書いてありました。クオン・デや潘佩珠のことや、それから私が下手な話で説明したところを実に簡潔に、たとえば「慶応義塾や法政促成科など大量の留学生枠を設け、更に東京同文書院や士官学校予備校だった振武学校など数多くの学校が、アジアからの留学生を積極的に受け入れた…云々」と、留学生の問題とかほとんど全部この本に入っています。五九〇円の本です、まだ、どこでも買えると思いますので、本屋の回し者ではありませんけど宣伝しておきます。それから、これは『ヴェトナム亡国史』という本ですが、東洋文庫というのはご存じでしょうか、平凡社から出ています。本文は潘佩珠が書いたものですが、この本には解説に柏原の伝記が載っています。この二冊は私の種本ではないのですけど、たぶん今日の話の大部分は入っています。古い本ですが図書館には必ずあると思います。これをお読みになると私の下手な話が分かりますので、もしよろしかったらお読み頂ければ幸いです。そんなことで終わらせて頂きます。長時間ご静聴ありがとうございました。

【司会】　ありがとうございました。では時間となりましたので、以上をもちまして保坂治朗先生の講演会、「目白にあった東京同文書院」を終了させて頂きます。皆様、今一度、保坂先生に盛大な拍手をお送りください。保坂先生ありがとうございました。

東京同文書院 目白中学

年号	記事
1868年（明治元）	8. 3 目白中学初代校長・細川護成，旧熊本藩主細川護久の長男として生まれる
1869年（明治2）	1.18 目白中学設立者・柏原文太郎，千葉県成田市寺台の農家に生まれる
1883年（明治16）	10.21 目白中学2代校長・細川護立，旧熊本藩主細川護久の4男として生まれる
1884年（明治17）	1.25 杉並中学初代校長・岡本隆治，大阪府に生まれる
1886年（明治19）	3.13 杉並中学2代校長・保田秀春，山形県長井市に生まれる
1891年（明治24）	5.15 杉並中学3代校長・岩本春市，山口県小野田市に生まれる
1893年（明治26）	柏原文太郎，東京専門学校（英語政治科）卒業，大隈賞を授与される。犬養毅らの紹介で近衛篤麿に会う
1896年（明治29）	柏原文太郎，東京専門学校の講師兼舎監となり支那研究会を組織
1897年（明治30）	秋 東亜会発足（陸羯南，三宅雪嶺，志賀重昂） 柏原文太郎，Henry William Wolff「国民銀行論」を翻訳，東京専門学校出版部より発行（早稲田教育に入る）
1898年（明治31）	6.— 同文会結成（近衛篤麿，白岩龍平，大内暢三，長岡護美，柏原文太郎） 11. 2 東亜会，同文会，合併し東亜同文会となる（会員60名，会長・近衛篤麿）機関誌「東亜時報」創刊号発行（12月） 東亜同文会，近衛会長と主な会員，犬養毅，柏原文太郎，谷干城，長岡護美，宮崎滔天，岡田時春 12.26 柏原文太郎，亡命中の中国人革命家・康有為と懇談
1899年（明治32）	10.— 中国人留学生のために東京に東京同文書院が開校
1900年（明治33）	5.12 南京同文書院開院（院長に佐藤正，就任） 6.— 東京同文書院院長に根津一，就任
1901年（明治34）	1.— 東亜同文書院設立，根津一，院長に就任 5.26 上海で東亜同文書院開院式 10. 3 柏原文太郎，東南アジア外遊中に近衛篤麿に帰朝
1902年（明治35）	1.19 神田錦町に開設された東京同文書院の経営が柏原文太郎に委ねられる 3.— 柏原文太郎，犬養毅の仲人で田辺安容子（岡山県後口郡長尾村出身）と結婚 4.— 根津一，東亜同文書院院長辞任で杉浦重剛，東亜・東京同文書院院長に就任
1903年（明治36）	5. 5 杉浦重剛，東亜同文書院院長辞任で根津一，同院長再任
1904年（明治37）	1. 2 近衛篤麿，死去
1905年（明治38）	4.— ヴェトナム民族独立運動指導者・潘佩珠（パンボイチャウ）来日し柏原文太郎の紹介で横浜に亡命中の中国人・梁啓超を訪ね「ヴェトナム亡国史」の草稿を渡す。潘，東京で犬養毅，大隈重信，根津一らに会う
1906年（明治39）	1.— 潘佩珠，犬養毅らとヴェトナム留学生の受入れについて相談，留学生・梁啓興を東京同文書院に入学させる 5.— 細川護成，東京同文書院院長に就任
1907年（明治40）	5.— 潘佩珠，第1回・ヴェトナム留学生16名を帯同し来日，以後，留学生の数は増加し一時は百名に達し，内，60名ほどは東京同文書院に入学（柏原はヴェトナム留学生への便宜が強まると清国人と偽って保護，ヴェトナム人青年は柏原夫妻をお父さん，お母さんと呼ぶ，同文書院は留学生のために教室，寮を増設し特別科を設ける） 6.10 「日仏協約」締結により在日ヴェトナム人の民族運動に対し日本政府の取り締まりはじまる
1908年（明治41）	5.20 潘佩珠，フランス政府の要請を受けた日本政府の追及を逃れて所在を晦ましし，東京同文書院の寄宿舎に潜伏 10.15 細川護成（東京同文書院院長）中国訪問に出発
1909年（明治42）	2.22 細川護成・柏原文太郎，日白中学設立のための「私立中学校設置認可願」提出 初代校長に細川護成 副校長・柏原文太郎 教頭・十時弥（後に旧制広島高校，熊本五高校長） 「設置認可願」記載内容 名 称・私立日白中学校 所在地・東京府豊多摩郡西合村大字下落合437番地外7番（近衛公爵所有地） 生徒定員・225人 校地面積・3000坪 3.— 日本政府，ヴェトナムの独立運動指導者，コンデ侯とファン・ボイ・チャウに国外退去命令 4.29 柏原文太郎，日本政府にヴェトナム留学生の取り扱いについて教育者として意見を述べる
1910年（明治43）	4.— 8.22 韓国併合の日韓条約，調印
1911年（明治44）	柏原文太郎，辛亥革命視察のため犬養毅とともに上海に渡る
1912年（明治45）（大正元）	生徒定員変更申請認可 柏原文太郎，立憲国民党から衆議院選挙に立候補して当選
1913年（大正2）	岡本隆治，東京大学を卒業して目白中学講師に就任
1914年（大正3）	4.— 8.26 校長・細川護成，死去（享年47歳）
1915年（大正4）	3. 3 目白中学2代校長に細川護立，就任 6. 8 篠田彦一（後，中大附高高校，第4代校長）生まれる
1916年（大正5）	4. 1 専任教員・秋山正平（国語・漢文）（早稲田大学出身）就任
1917年（大正6）	4.— 10. 1 岩本春市，専任教員に就任（東京高等師範学校本科・物理学科，翌年3月卒業）
1918年（大正7）	1.— 専任教員・牛山茂樹（英語）就任（大正4年東京帝国大学卒業，途中，大正7年4月から8年鉄道省勤務，後，目白中学に再任） 4.— 12.— 東京同文書院閉鎖へ
1919年（大正8）	
1920年（大正9）	柏原文太郎，原敬内閣に対して義務教育費と私立学校への補助金増額を要求 ＊東亜同文書院創立20周年 ＊野球部創立
1921年（大正10）	定員変更願（700名を750名）（1教室50名，15教室）校舎増設，設置申請
1922年（大正11）	柏原文太郎，中国から帰国 東京同文書院最終閉鎖（最後の卒業生5名，卒業生総数864名）真口同文書院中学部開設 9. 1 専任教員・林十一（体操・音楽）（日体専門部出身）就任 11.28 東京府に校舎増設申請提出（12月5日，認可）

＜追加年表＞

１８９５（明治28）日清戦争終る

１８９６（明治29）嘉納治五郎、清国留学生の為に亦楽書院（後の弘文学院）開校

１８９８（明治31）戊戌の変法（６月）失敗（９月）康有為、梁啓超、日本へ亡命
清朝、日本への留学生派遣（張之洞）　翌年、近衛・張会談

１９００（明治33）義和団、北京包囲、八カ国軍、北京総攻撃　留学生帰国

１９０２（明治35）神田駿河台に「清国留学生会館」清国留学生500人

１９０３（明治36）東京同文書院第一期卒業式、卒業生の陸宗輿、劉崇傑は早大に進学、後に陸は駐日公使になり、日本の対華21ヶ条の中国側代表の一員になった、そのため五四運動で売国奴と糾弾され罷免される、劉は駐日公使館参事を経て民国外交部次長になる。　振武学校開校　清国留学生1000人

１９０４（明治37）法大、明大に留学生のための速成科設置

１９０５（明治38）日露戦争、日本勝利　孫文来日、東京で中国革命同盟会結成
清国留学生8000ー１万人　早大「清国留学生部」設置
日本政府「清国留学生取締規則」公布　留学生同盟休校
法政の陳天華、抗議自殺　留学生一斉帰国

１９０６（明治39）ヴェトナムの王族クオン・デ侯、来日

１９０７ー０８年　日仏協約による弾圧のためヴェトナム人留学生急減

１９０９（明治42）嘉納治五郎の弘文（宏文）学院閉校(3810人卒業)

１９１０（明治43）早大、明大の留学生部閉鎖

１９１１（明治44）辛亥革命、始まる　大多数の留学生帰国

１９１２（明治45）中華民国成立（大総統、孫文から袁世凱へ）

１９１３（大正　2）東京同文書院へ中国各省の依託学生（内・武官98名）入学
学生数392名　教室増築　村田銃120丁購入（武官90名は12月に帰国）
第二革命に失敗し孫文ら日本に亡命　在日留学生2000人超

１９１４（大正　3）学生数260名　在日留学生5ー6000人　第一次大戦勃発

１９１５（大正　4）日本、対華21ヶ条要求　留学生帰国多数　同文書院入学生８名

１９１６（大正　5）帰国留学生急増　同文書院学生17名

１９１７（大正　6）同文書院学生20名　柏原、衆議院議員選挙に当選

１９１８（大正　7）大戦終わる

１９１９（大正　8）「五四運動」始まる　柏原、中国に学校設置を同文会から委嘱される

同文書院学生数　1920年２２名　1921年２１名　1922年数名（閉校）

乙.

日白（下善谷）時代の日白中学校正門

昭和4年の同文書院正門（東京時代の校舎とそっくり）

柏原文太郎

かしはら・ぶんたろう

明治2年～昭和11年（1869～1936）

日中親善と東南アジア民族の自主独立に生涯をかけた政治家

成田市寺台に生まれる。東京専門学校（現早稲田大学）を卒業する。明治30年、近衛篤麿・犬養毅・大隈重信らと共に東亜同文会設立を提唱した。

日中両国の子弟の教育にあたった。

その後、明治35年の政治活動を始め、また、ベトナム独立の志士・潘佩珠らを援助するなど、東南アジア民族の独立に尽力した。明治38年千葉県から衆議院議員選挙に立候補、4期務め、日中提携を中心とする経済問題などで活躍をした。

また、東京の日白中学校を設立するなど、学校経営にも手腕を発揮した。妻の安喜子は、大日本婦人会成田支部長・成田市婦人会長として活躍した。

表彰状から日の書状

成田市立図書館『成田・歴史とその人々』より

東京・立花邸の文太郎

後列・第三議員席

日白中学校、新入生学業記念撮影帖（大正7年3月）の前列諸文と柏原文太郎。
その昔、東京同文書院の院長、天白を兼務していることを示している。

和歌、次頁とつながっている。

細川侯爵薨去

▽葬儀は九月五日

細川護立侯

侯の閲歴

侯は明治3年2月18日肥後熊本藩に生れ、明治17年学習院を卒業し、同年子爵を授けられ、貴族院議員となること十六年、その間明治44年に侍従長となり、大正8年に宮内大臣に任ぜられ、昭和14年に内大臣となり、昭和20年に至るまで、その職にあり、昭和21年に至り、内大臣を辞し、翌22年に貴族院の廃止に伴い、侯爵となり、同年5月5日逝去されたものである。

侯は、その間、大正8年パリ講和会議に参加し、同年11月ベルサイユ条約の調印に参加し、大正9年ワシマ会議に参加し、昭和2年ジュネーブ会議に参加し、昭和5年ロンドン会議に参加し、昭和7年ローザンヌ会議に参加し、昭和8年ロンドン会議に参加し、昭和9年ロンドン会議に参加し、昭和10年ロンドン会議に参加し、昭和11年ロンドン会議に参加し、昭和12年ロンドン会議に参加し、昭和13年ロンドン会議に参加し、昭和14年ロンドン会議に参加し、昭和15年ロンドン会議に参加し、昭和16年ロンドン会議に参加し、昭和17年ロンドン会議に参加し、昭和18年ロンドン会議に参加し、昭和19年ロンドン会議に参加し、昭和20年ロンドン会議に参加し、昭和21年ロンドン会議に参加し、昭和22年ロンドン会議に参加し、昭和23年ロンドン会議に参加し、昭和24年ロンドン会議に参加し、昭和25年ロンドン会議に参加し、昭和26年ロンドン会議に参加し、昭和27年ロンドン会議に参加し、昭和28年ロンドン会議に参加し、昭和29年ロンドン会議に参加し、昭和30年ロンドン会議に参加し、昭和31年ロンドン会議に参加し、昭和32年ロンドン会議に参加し、昭和33年ロンドン会議に参加し、昭和34年ロンドン会議に参加し、昭和35年ロンドン会議に参加し、昭和36年ロンドン会議に参加し、昭和37年ロンドン会議に参加し、昭和38年ロンドン会議に参加し、昭和39年ロンドン会議に参加し、昭和40年ロンドン会議に参加し、昭和41年ロンドン会議に参加し、昭和42年ロンドン会議に参加し、昭和43年ロンドン会議に参加し、昭和44年ロンドン会議に参加し、昭和45年ロンドン会議に参加し、昭和46年ロンドン会議に参加し、昭和47年ロンドン会議に参加し、昭和48年ロンドン会議に参加し、昭和49年ロンドン会議に参加し、昭和50年ロンドン会議に参加し、昭和51年ロンドン会議に参加し、昭和52年ロンドン会議に参加し、昭和53年ロンドン会議に参加し、昭和54年ロンドン会議に参加し、昭和55年ロンドン会議に参加し、昭和56年ロンドン会議に参加し、昭和57年ロンドン会議に参加し、昭和58年ロンドン会議に参加し、昭和59年ロンドン会議に参加し、昭和60年ロンドン会議に参加し、昭和61年ロンドン会議に参加し、昭和62年ロンドン会議に参加し、昭和63年ロンドン会議に参加し、昭和64年ロンドン会議に参加し、平成元年ロンドン会議に参加し、平成2年ロンドン会議に参加し、平成3年ロンドン会議に参加し、平成4年ロンドン会議に参加し、平成5年ロンドン会議に参加し、平成6年ロンドン会議に参加し、平成7年ロンドン会議に参加し、平成8年ロンドン会議に参加し、平成9年ロンドン会議に参加し、平成10年ロンドン会議に参加し、平成11年ロンドン会議に参加し、平成12年ロンドン会議に参加し、平成13年ロンドン会議に参加し、平成14年ロンドン会議に参加し、平成15年ロンドン会議に参加し、平成16年ロンドン会議に参加し、平成17年ロンドン会議に参加し、平成18年ロンドン会議に参加し、平成19年ロンドン会議に参加し、平成20年ロンドン会議に参加し、平成21年ロンドン会議に参加し、平成22年ロンドン会議に参加し、平成23年ロンドン会議に参加し、平成24年ロンドン会議に参加し、平成25年ロンドン会議に参加し、平成26年ロンドン会議に参加し、平成27年ロンドン会議に参加し、平成28年ロンドン会議に参加し、平成29年ロンドン会議に参加し、平成30年ロンドン会議に参加し、平成31年ロンドン会議に参加し、令和元年ロンドン会議に参加し、令和2年ロンドン会議に参加し、令和3年ロンドン会議に参加し、令和4年ロンドン会議に参加し、令和5年ロンドン会議に参加し、令和6年ロンドン会議に参加し、令和7年ロンドン会議に参加し、令和8年ロンドン会議に参加し、令和9年ロンドン会議に参加し、令和10年ロンドン会議に参加し、令和11年ロンドン会議に参加し、令和12年ロンドン会議に参加し、令和13年ロンドン会議に参加し、令和14年ロンドン会議に参加し、令和15年ロンドン会議に参加し、令和16年ロンドン会議に参加し、令和17年ロンドン会議に参加し、令和18年ロンドン会議に参加し、令和19年ロンドン会議に参加し、令和20年ロンドン会議に参加し、令和21年ロンドン会議に参加し、令和22年ロンドン会議に参加し、令和23年ロンドン会議に参加し、令和24年ロンドン会議に参加し、令和25年ロンドン会議に参加し、令和26年ロンドン会議に参加し、令和27年ロンドン会議に参加し、令和28年ロンドン会議に参加し、令和29年ロンドン会議に参加し、令和30年ロンドン会議に参加し、令和31年ロンドン会議に参加し、令和32年ロンドン会議に参加し、令和33年ロンドン会議に参加し、令和34年ロンドン会議に参加し、令和35年ロンドン会議に参加し、令和36年ロンドン会議に参加し、令和37年ロンドン会議に参加し、令和38年ロンドン会議に参加し、令和39年ロンドン会議に参加し、令和40年ロンドン会議に参加し、令和41年ロンドン会議に参加し、令和42年ロンドン会議に参加し、令和43年ロンドン会議に参加し、令和44年ロンドン会議に参加し、令和45年ロンドン会議に参加し、令和46年ロンドン会議に参加し、令和47年ロンドン会議に参加し、令和48年ロンドン会議に参加し、令和49年ロンドン会議に参加し、令和50年ロンドン会議に参加し、令和51年ロンドン会議に参加し、令和52年ロンドン会議に参加し、令和53年ロンドン会議に参加し、令和54年ロンドン会議に参加し、令和55年ロンドン会議に参加し、令和56年ロンドン会議に参加し、令和57年ロンドン会議に参加し、令和58年ロンドン会議に参加し、令和59年ロンドン会議に参加し、令和60年ロンドン会議に参加し、令和61年ロンドン会議に参加し、令和62年ロンドン会議に参加し、令和63年ロンドン会議に参加し、令

文部省
設立者侯爵細川護成外一名
文部大臣小松原英太郎
目白近衛町土地賣却
大正14年11月13日「朝日」
海月十日、二十五日、定期發行
大日本職業別明細圖
東京市
板橋區
學校
目白中學校
東京同文書院
東京戦列車の東亜同文書院
(七太郎のスケッチ)

昭和１９年、官立無線電信講習所板橋支所（東京・電通大の前身）

練馬中学校校舎（終戦後）

静岡県袋井市浅羽町　常林寺境内

浅羽佐喜太郎公記念碑

（一九九八年七月三一日撮影）

この石碑は、かつてフランスの植民地であったベトナムの、独立運動の指導者潘佩珠が、自分たちのために私財を投じて援助してくれた浅羽佐喜太郎に対し、追慕の思いとベトナム独立の悲願を込め。一九一八年（大正七）に東浅羽村の人々の暖かい支援を得て建立されたものです。

浅羽佐喜太郎は、一九六七年（慶応三）に梅山八幡神社の神主家に生まれ、帝国大学医科大学（東大医学部）卒業後、小田原に浅羽医院を開業し、そこで密航してきた潘と出会います。佐喜太郎は病棟の一室を提供し、彼らの活動に対し経済的援助をはじめ、さまざまな支援を行いました。

しかし、フランスの弾圧は厳しく、日本政府は潘たちベトナム人留学生の国外退去を命じ、一九〇九年（明治四二）には潘も日本を去ります。翌年、佐喜太郎は四三歳の若さで亡くなり、二人は二度と会うことはできませんでした。

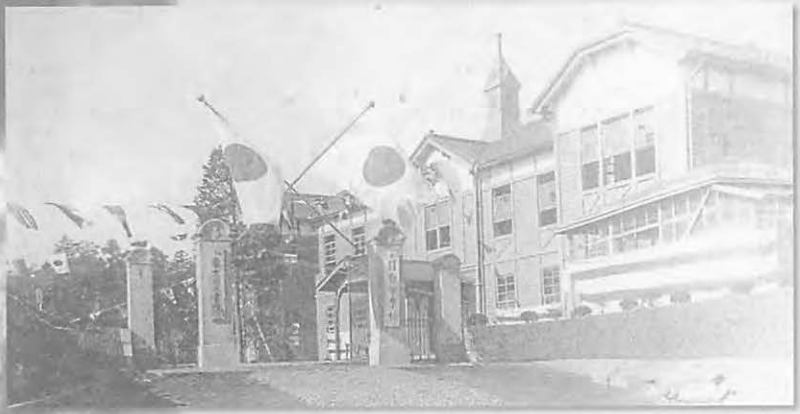
一九一七年（大正六）潘は密かに日本を訪れ、佐喜太郎の死を知ります。翌年彼は浅羽家の墓所のある梅山の地に石碑建立のため訪れ、東浅羽村村長の呼びかけに応じた村人の協力を得て、この記念碑を完成しました。

浅羽町教育委員会　二〇〇二年三月

東京、雑司ヶ谷霊園『陳東周之墓』
明治４１年５月没。
クオン・デが建立、

東亜同文書院大学記念センター講演会

「目白にあった東京同文書院」



講師 保坂治朗 氏〈元 中央大学附属高等学校教員〉

日時 2008年10月18日(土)14:00～16:00

場所 愛知大学豊橋校舎 5号館1階510教室
※豊橋鉄道渥美線「愛知大学駅前駅」下車すぐ

日清戦争後、日本と中国では両国の関心が高まるなか、1898年に近衛篤麿を会長とする東亜同文会が結成されました。同会は、まず日本に留学する青年たちのために東京同文書院を開校し、つぎに1901年中国側の協力をえて上海に東亜同文書院を開き、日本の青年たちを中国大陸の地で育てました。東京同文書院と東亜同文書院は、東亜同文会の活動を象徴する両輪であり、いわば兄弟校というべき関係だったのです。

はじめ、中国人のみを入れていた東京同文書院でしたが、近衛篤麿の側近であり同院の責任者であった柏原文太郎によって、日本人を対象とする目白中学校(現・中央大学附属高等学校)が併設され、大正期には多くの志望者を集める有名校として知られるようになります。

今回の講演では、東亜同文書院の兄弟校といえるにもかかわらず、資料的制約などから、これまで十分に明かされなかった東京同文書院と、その関連学校である目白中学校についてお話いただきます。

入場無料
どなたでもご自由にご参加下さい。

事前申込み不要

主催◆愛知大学東亜同文書院大学記念センター／オープン・リサーチ・センター
後援◆財団法人 霞山会

お問い合わせ

愛知大学東亜同文書院大学記念センター
オープン・リサーチ・センター
〒441-8522 愛知県豊橋市町畑町1-1 TEL(0532)47-4139 FAX(0532)47-4196
E-mail:tshien@ml.aichi-u.ac.jp